

国語科における「パフォーマンス評価」による指導と評価の一体化の試み — 中学校生活を報告する文章を書いて交流しよう! —

三藤 敏樹

横浜市立港南台第一中学校 主幹教諭

1 国語科における「思考・判断・表現」の評価

平成22年3月24日の中央教育審議会中等中等教育分科会教育課程部会の報告「児童生徒の学習評価の在り方について」*1により、新しい学習指導要領の下における評価の観点が、「知識・理解」「技能」「思考・判断・表現」「関心・意欲・態度」に整理された。これらについて、国語科においては次のように評価することとなる。*2

12. 国語科における観点別評価

領域・事項	評価の観点
国語	国語
	いわゆる4観点
	関心・意欲・態度
A 話すこと・聞くこと ↔ 話す・聞く能力	思考・判断・表現
B 書くこと ↔ 書く能力	
C 読むこと ↔ 読む能力	技能
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 ↔ 言語についての知識・理解・技能	知識・理解

本稿では、国語科における「思考・判断・表現」の評価について、「書くこと」の授業実践から提案する。

2 授業実践「中学校生活を報告する文章を書いて交流しよう」

この授業は、平成22年度第39回全日本・第53回全関東地区中学校国語教育研究協議会神奈川大会の第3分科会において提案したものである。授業の全体については学習指導案を参照されたい。

この授業では、いわゆる「作文」に対する苦手意識を払拭するため、書くべき内容をはっきりさせ、書くためのメディアを用意することにより、主体的に「書くこと」活動に取り組むことができるようにした。また、この時期の中学校1年生には、小学校の先生に現在の自分について伝えたいというモチベーションがあり、それを生かして学習意欲を喚起するようにした。さらに、中学校に入学して半年間共に学び生活してきた仲間との交流を通して学習することにより、実生活において言語を活用しながら互いの能力を伸ばす場面とすることができるよう配慮した。

授業にあたり、特に重視したことは次の三点である。

- (1) 生きて働く言語能力を育てるために多様な内容や形態の言語活動を行う
国語科の授業は、言語活動を通して言語能

力を身に付けていく営みである。「付けたい力」としての指導事項について、その力を身に付けるための「実の場」としての言語活動を意図的・計画的に設定することにより、生徒一人ひとりの言語能力をより確かなものにするができる。この授業では、中学校生活を報告する文章を「書くこと」を行い、書いた文章を交流する、すなわち「読むこと」「話すこと・聞くこと」の言語活動は自分で再び「書くこと」に取り組むことを通して、書く能力をより確かなものにしていくことをねらいとしている。

(2) 適切に伝え合うために、「言語意識」を明確にした言語活動を行う

国語科の授業において育成する言語能力は、「社会生活に生きて働くよう、一人ひとりの生徒が言語の主體的な使い手として、相手、目的や意図、多様な場面や状況などに応じて適切に表現したり正確に理解したりする力」*3である。そのような力を「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の言語活動を通して育成する際は、「相手」「目的や意図」「多様な場面や状況」等について明確な意識を持たせて言語活動に取り組む必要がある。具体的には、「目的意識」(何のためにどのようなねらいをもって言語活動を行うのか)、「相手意識」(誰に対する言語活動なのか)、「場面意識」(どのような場面における言語活動なのか)、「方法意識」(どのような方法、手段、条件で言語活動を行うのか)、「評価意識」(言語活動の過程及び結果はどうであったか)等を明確にした上で言語活動を行わなければならない。*4

この授業では、「小学校の先生」という「相

手」に対して、「中学生としての現在の自分について報告する」という「目的」を持ち、「国語科の授業」という場面において、「報告する文章を書く」という「方法」で言語活動を行い、書いた文章を交流するという「評価」の場面を設定している。それぞれの言語活動の中で、常に言語意識を明確に持たせて取り組ませるようにしたい。

(3) 言語活動を「小中一貫カリキュラム」に位置付ける

横浜市が推進する「小中一貫カリキュラム」は、義務教育9年間の連続性や適時性を図りながら、一人ひとりの子どもの学習状況に柔軟に対応するカリキュラムである。国語科の目標や指導事項の定着を図るには、9年間を見通した学習指導を実現し、日々の授業、単元、学年、小中学校間の指導内容の連続性のみならず、学習評価にもつながりをもたせて学習指導を支えることが必要である。*5

今回の授業にあたっては、小学生時代の自分の視点と中学生になって半年が経過した現在の自分の視点とを、自分自身が書いた文章を材料に振り返り、現在の自分について小学校の先生に報告する文章を書き、交流によってそれを練り上げていく言語活動を設定した。それに際して多様な視点からの助言ができるよう、港南台第一中学校の研究発表会(平成22年9月)においてこの授業を行った際は、学区内の小学校の教員(学習者が6年生当時の担任)とのティーム・ティーチングを試みた。全中国の大会では、授業を行った中学校の学区の小学校の旧6年の担任の先生に参加していただき、また助言者の指導主事(小学校国語)ならびに司会者(授業者と同じ中学

校に勤務)、記録者もTTとして授業に参加した。

3 国語科における「パフォーマンス評価」

授業における言語活動は「パフォーマンス課題」であり、思考力・判断力・表現力等を評価する際に「パフォーマンス評価」を取り入れることにより、「指導と評価の一体化」を図る授業改善とより信頼性・妥当性のある評価が可能になる。

「パフォーマンス課題」とは、「リアルな文脈（あるいはシミュレーションの文脈）において、様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような課題」であり、ここでは「論説文やレポート、展示物といった完成作品（プロダクト）や、スピーチやプレゼンテーション、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）」が評価される。通常の筆記テストは幅広い知識を覚えているかを評価するには適しているが、学びの文脈の中で知識やスキルを使いこなす能力を評価しようとする際は、パフォーマンスの評価が必要となる。指導と評価の一体化を図る授業において、パフォーマンス課題は、教育目標の中核部分、つまり、色々な文脈に転移して用いられるような重要部分に対応させて使う必要がある。付けたい力をうまく引き出し、伸ばすような条件を設定する必要がある。^{*6}

このことについて、前述の「児童生徒の学習評価の在り方について」では、「評価規準や評価方法については、近年諸外国においても様々な研究や取組」が行われていることを指摘し、そのような取組の一つとして「思考力・判断力・表現力等を評価するに当たって、

「パフォーマンス評価」に取り組んでいる例も見られる。パフォーマンス評価とは、様々な学習活動の部分的な評価や実技の評価をするという単純なものから、レポートの作成や口頭発表等により評価するという複雑なものまでを意味している。または、それら筆記と実演を組み合わせたプロジェクトを通じて評価を行うことを指す場合もある。」と説明している。

この授業においては、単元の目標を実現するため、「書くこと」「話すこと・聞くこと」の言語活動による「パフォーマンス課題」を設定し、実際の活動の中での生徒の表れを明らかにした評価規準を設定することにより、思考力・判断力・表現力等を育成する指導と評価の一体化を図っている。

また、同報告は、「授業改善のための評価は日常的に行われることが重要である。一方で、指導後の児童生徒の状況を記録するための評価を行う際には、単元等ある程度長い区切りの中で適切に設定した時期において「おおむね満足できる」状況等にあるかどうかを評価することが求められる」と指摘し、授業における「指導と評価の一体化」としての評価と「児童生徒の状況を記録するための評価」のそれぞれについて適切な時期に評価を行うことを求めている。今回の学習指導案では、前者を「日常的な評価」、後者を「記録する評価」として評価規準とともに示すことを試みた。

パフォーマンス評価を行うにあたっては、次のような「ルーブリック」（rubic：評価の指標）を活用することが有効である。^{*7}

第4時の「話し合いの行動」のルーブリック

A○	交流の際に、読み手（相手）である小学校の先生に対する意識を持ち、「中学生としての現在の自分について報告する」という「目的」に即して書いた文章を読み合い、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。
A	交流の際に、書き手と読み手の両方の視点から題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて自分の考えをまとめ、意見や助言を伝えている。
B 評価 規準	書いた文章について、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。
CO	書いた文章について、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて自分の意見を持つことはできるが、話し合いの中で意見や助言として発言することが難しい。
C	書いた文章について、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて自分の意見をまとめることが難しい。

ここでは、評価規準に示した「おおむね満足できる状況」を実現していると判断される生徒のありようを「B」とし、「十分満足できる状況」を「A」、「十分満足できる状況のうち、特に高い程度のもの」を「A○」、「努力を要すると判断される状況」を「CO」、「努力を要すると判断される状況のうち、一層の努力を要するもの」を「C」として5段階で示した。ただし、「A○」「A」で表される状況は必ずしも段階的に示されるものではなく、「十分満足できる状況」は多様な表れをする場合があることに留意しておきたい。また、「CO」「C」で表される「努力を要する状況」については、「B」で表される「おおむね満足できる状況」を実現するために必要な手だては生徒の段階に応じて示す必要がある。そこで、この授業の第4時（本時）においては、このルーブリックに基づき、「Aの状況を実現していると判断する際のキーワードや具体的な姿の例」ならびに「Cの生徒への手だて」

を複数示してある。

「A○」と評価した学習者の振り返りの記述

班の人からは「もっと気持ちをいれたらいい」というアドバイスをしてもらい、文章の中に「うれしい」「がんばった」「大変だった」などを入れてみたけど、自分の体験したことにより近づいて気持ちが伝えられる表現はないかと考えていました。

ちょうどその時、研究授業を見に来ていた方が、「天気」と言ってくれて、私はそこで「なるほど」と思いました。そこで、自分が体験した日の天気、晴れならうれしさを表すことができ、二つの意味が入ってよく伝わって風景も浮かぶので、参考にして使いました。

私は友達からもらったアドバイスと先生方からもらったアドバイスをもらって組み合わせ、より気持ち、風景を表現できるようまとめることができました。

ルーブリックは、実際の生徒の状況に基づいて再検討し修正する必要がある。その際は、あくまで指導事項に基づく評価規準を根拠として、生徒のパフォーマンスをルーブリックにあるような記述語として表現する。

このようなルーブリックを作成・活用することにより、「Cの生徒への手だて」に示す手だてをより具体的なものにすることができ、また、「報告文」のような成果物や生徒の活動を質的に評価する際にも信頼性・妥当性を確保することが可能となる。

ただし、ルーブリックを作成することに多大な時間や労力をかけ過ぎてしまい、実際の生徒のパフォーマンスに対する評価に十分な時間や労力が割けなくなってしまっただけは本末転倒である。あくまでルーブリックは、評価規準に基づいて生徒のパフォーマンスを質的に評価するためのツールとして活用するものであり、生徒自身の学びの姿から作成するものであることを強調しておきたい。

第39回全日本・第53回全関東地区中学校国語教育研究協議会 神奈川大会 第3分科会「書くこと」*1

国語科学習指導案

横浜市立港南台第一中学校 三藤 敏樹

1 日 時 平成22年11月12日(金) 13:20～14:10

2 学習者(会場) 横浜市立西中学校1年2組(教室)

3 教科の視点から育成を目指す能力

(1) 学習指導要領の指導事項から

- 書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりする能力

(新学習指導要領「B 書くこと(1) オ」言語活動例 (2)ウ)

(2) 評価規準

評価規準の作成のための参考資料(平成22年11月国立教育政策研究所教育課程研究センター)

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
① 目的や意図に応じ、構成を考え、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして文章に書くこととしている。	② 書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりしている。	③ 語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意して書いている。

4 単元・学習材名

中学校生活を報告する文章を書いて交流しよう

5 授業にあたり

(1) 今回の授業における提案

- ア 新学習指導要領の新しい指導事項である「書くこと」における「交流」の言語活動の提案
- イ 横浜市教育委員会・横浜市教育課程研究委員会の推進する「小中一貫カリキュラム」を具現化する授業の提案
- ウ 横浜市立港南台第一中学校の実践に基づく「新しい授業研究の在り方」(「プロセス重視の指導案」「参加者全員で創る授業」「学習者からの授業評価としてのインタビュー」「ラウンドテーブル型パネルディスカッションによる研究協議」等)の提案

(2) 授業について

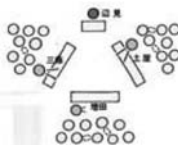
- ア 授業は、授業者・司会者・記録者・助言者によるチーム・ティーチングで行う。
 司会者 横浜市立港南台第一中学校 土屋 京子 教諭
 記録者 横浜市立新田中学校 辺見美弥子 教諭
 助言者 横浜市教育委員会南部学校教育事務所 増田 伸子 指導主事
- イ 西前小学校の昨年度6年担任の先生方にも参加をお願いしている。
- ウ 授業の中でグループで交流する場面では、参加者の先生方もぜひ言語活動に参加していただきたい。

(3) 研究協議について

- ア 「ラウンドテーブル型パネルディスカッション」の形式で行う。
 授業者(三藤)、司会者(土屋)、助言者(増田)が、それぞれ次の立場のパネリストとして討論を行う。
 土屋…「『書くこと』の授業における言語活動」について
 三藤…「『書くこと』の授業における評価」について
 増田…「『小中一貫カリキュラム』における『書くこと』」
 参加者は、興味があるテーマのフロア(パネリストの後ろの椅子)に着席する。

(2) 次第

- ア 各パネリストからの意見表明
- イ 3つの立場ごとにフロアとの協議
 ※生徒へのインタビュー(学習者からの授業評価)を中心に行う。
 ※協議終了後、生徒は退席。
- ウ 各パネリストからの報告
 土屋→三藤→増田(増田指導主事は全体のまとめを含む)



*1 この学習指導案は当日の内容を港南台第一中学校が提案している形式に改めたものである。

6 能力育成のプロセス(6時間扱い 本時は4時間目)

次 時	具体的評価規準 (①～④は、3(2)の評価規準の番号) 【評価の方法】 ○ Aの状況を実現していると判断する際の キーワードや具体的な姿の例 ☆ Cの生徒への手だて	○主な学習活動 国語科における言語活動(下線)※ ・留意事項	
I 1		<ul style="list-style-type: none"> この活動は中学校入学後すぐ、国語の授業についてのガイダンスが終わった段階で行っておく。形式にはあまりこだわらず、自分の考え(思いや決意)を自由に記述するよう助言する。 	
II	2 ～ 3	③ 事象や行為などを表す多様な語句について、自分が文章で表現するときのように活用すればよいかを考えながら書いている。 【報告文の記述の確認】～日常的な評価	<ul style="list-style-type: none"> 中学校に入学して半年が経過した時点で、小学校の先生に現在の中学校生活について、入学時の自分と比較しながら報告する文章を書く。 報告する対象が小学校の先生であることを念頭に置いて、書く材料を集めさせ、相手を意識して、伝えるべき事柄の内容や順序などを考えさせる。
	4 本 時	② 書いた文章について、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。 【話し合いの行動の確認】～日常的な評価 ○ 交流の際に、読み手(相手)である小学校の先生に対する意識を持ち、「中学生としての現在の自分について報告する」という「目的」に即して書いた文章を読み合い、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。 ○ 交流の際に、書き手と読み手の両方の視点から題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて自分の考えをまとめ、意見や助言を伝えている。 ☆ 他者から自分に対しての意見や助言をメモさせ、自分が他者に対してどのように考えを述べたらよいかの参考にさせる。 ☆ 自分が書いた作文について、「何について報告しているか」「どんな材料を用いているか」「根拠となる事実(体験)は何か」についてもう一度考えさせる。	<ul style="list-style-type: none"> 3～4人のグループで書いた作文を読み合い意見や助言を交換し合う。 文章を書く過程で学んだことをもとに、次のようなことを重点に交流するようにさせる。 題材をどのようにしてとらえたか。 材料をどのようにして収集、整理したか。 根拠に当たる部分をどのように明確に書いたか。 他者からの意見や助言をメモさせる。
III	5	② 意見や助言の交換から学んだことを、自分の表現の参考にして書いている。 【推敲した報告文の記述の確認】～記録する評価	<ul style="list-style-type: none"> 交流した時に得た他者の意見や助言を生かして、書いた文章を推敲し、清書する。 相手に正確に事実を伝えるという視点で、しっかり記述されているかどうかを確かめながら推敲させる。 報告するという目的に対して、足りない内容はないか。 相手や内容に合った適切な語句を選んで使っているか。 文字の表記や、漢字と仮名の使い分けは適切か。 文や段落の長さおよび文や段落の接続の関係などは適切か。
	6	① 日常生活の中から課題を決め、材料を集めながら自分の考えをまとめようとしていたり、交流を通して考えを深めようとしていたりしている。 【振り返りの記述の分析】～記録する評価	<ul style="list-style-type: none"> 学習の振り返りを記述し、報告する文章を書く時に自分の考えをどのようにまとめたらよいかや、記述する際に注意することについて、自分の考えを持つ。 「次に報告文を書くときにはどのような点に注意したらよいか、今回の経験をもとに考える」という視点で学習の振り返りを記述するようにさせる。

※ 国語科における学習活動は基本的にすべて言語活動であるので、ここでは「話すこと・読むこと」の授業において学習者が思考・判断したこと、思考・判断した過程や結果を表現することに関わる言語活動を下線で示した。

〈引用／参考文献〉

- *1 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/attach/1292216.htm
- *2 高木展郎「これからの時代の国語科の授業～言語能力の育成をめざして」（平成22年度第39回全日本・第53回全関東地区中学校国語教育研究協議会研究紀要 pp.12-19）
- *3 中学校学習指導要領解説 国語編 p.9
- *4 河野庸介『中学校新国語科授業の基本用語辞典』（2006年 明治図書）
- *5 横浜市の「小中一貫カリキュラム」の視点から本実践を記述したものが、『横浜版学習指導要領評価の手引』（2011年 横浜市教育委員会）pp.28-30に収録されている。
- *6 「パフォーマンス課題」については、西岡加名恵・田中耕治 編著『「活用する力」を育てる授業と評価 中学校 パフォーマンス課題とルーブリックの提案』（2009年 学事出版）pp.8-10参照。
- *7 「ルーブリック」については、前掲書（*4）pp.14-16を参照。